

ISSN 1882-9511

愛知学院大学薬学会誌

第6巻 2013年12月

THE AICHI-GAKUIN JOURNAL OF PHARMACEUTICAL SCIENCES

VOLUME 6 DECEMBER 2013

愛知学院大学薬学会

THE AICHI-GAKUIN SOCIETY OF
PHARMACEUTICAL SCIENCES

NAGOYA JAPAN

巻 頭 言

薬学研究科博士課程へ行こう

大学院薬学研究科長 井上 誠

平成24年4月に薬学新教育制度下、新時代の薬学・医療薬学を先導する人材を育成するために大学院薬学研究科博士課程（4年制課程）が開設されました。薬学教育・研究の発展において、薬学部と大学院薬学研究科との密接な連携は必要不可欠であり、大学院薬学研究科の充実が望まれています。

しかし、初年度の全国私立大学大学院薬学研究科博士課程の入学者状況は、入学定員167名に対して151名と定員を充足しておらず、定員割れをした薬学研究科は38大学中18大学ありました。平成25年度においてもこの状況はあまり変わっておりません。薬学にとって厳しいこのような状況下で、本学薬学研究科では定員の充足を目指して平成25年度より、リサーチアシスタント制度を導入し、教育充実費の減額を実施致しました。また、同窓会奨学金制度も新設され、その他の学費援助制度の充実を考慮しますと、学費の負担は非常に軽減されました。さらに、社会人大学院生に対しては長期履修制度を導入し、時間に制約されることなく十分に研究に打ち込める体制を整えました。これらの制度の導入の成果は未だ不明ですが、薬学・医療薬学の多彩な分野でリーダーシップを持って活躍したいという希望を持っている学生さんにとって福音になればと思っています。もちろん大学院の充実には、教員が独創性、新規性に富んだ研究成果を世界に発信し続けることが最も重要であり、教員の切磋琢磨している姿が学生に対する一番の刺激であろうことは間違いありません。

他大学の先生方と大学院に関して話をする機会が多くあります。その先生方が共通して言われることは、「薬学研究科博士課程への進学は今がチャンスでしょう」です。薬学研究科博士課程を修了した学生がいない現在、課程修了後の将来は不透明であります。しかし、アカデミックなポジションを希望する人、中堅以上の病院で薬剤師として働くことを希望する人、あるいは、その他いろいろな医療関連の職場で働くことを希望する人にとって、近い将来、「博士力」が要求されるようになることを予想している先生方が多いようです。

人生は選択の積み重ねであり、自ら大きな決断を持って選択したことに対しては高いモチベーションが維持でき、得られた成果に対して大きな充実感と自信を持つことができます。そして、選択の大原則は、「可能性の大きな方を選択する」です。是非、社会人として働いている卒業生の皆さん、進路を考えている学生の皆さん、夢と希望のある選択を継続してください。

そして、皆さんの力を愛知学院大学大学院薬学研究科に結集することができたならば、愛知学院大学薬学部および大学院薬学研究科の益々の発展が可能になると考えております。

目次

巻頭言

薬学研究科博士課程へ行こう
大学院薬学研究科長 井上 誠

総説

ウイルソン病の遺伝的背景と薬物による除銅治療の進歩 1
林 久男、服部 亜衣、巽 康彰、加藤 宏一

薬局早期体験学習における一般用医薬品についての愛知学院大学薬学生の
認識・理解度調査 7
浦野 公彦、巽 康彰、恒川 由己、長田 孝司、上井 優一、服部 亜衣、
曾田 翠、堺 陽子、岩本喜久生、國正 淳一、脇屋 義文

学会・研究会報告

韓国薬学研修報告 鍋倉 智裕 15
長谷川博之 17
中村 真未 19
水野 靖久 21
三輪美代子 23
澤田 真希 25

「透析施行2施設間におけるダルベポエチンアルファと遺伝子組み換え型エリスロポエチン
製剤との使用量比較と貧血改善効果の検討」の演題発表に関する報告書 27
末吉 真樹

平成24年度愛知学院大学薬学部FDワークショップ報告書 29
井上 誠、樫 彰、脇屋 義文、田中 基裕、武田 良文

医療生命薬学研究所

医療生命薬学研究所組織 41
医療生命薬学助成（プロジェクト提案型研究） 42
精神・神経疾患におけるバイオマーカーの探索と創薬展開 43
鍋倉 智裕、武田 良文、大井 義明、波多野紀行、上井 優一

講座紹介・業績リスト 45
薬学部医療薬学専攻 四期生 卒業論文課題一覧 95
評議員会便り 101
投稿規定 105
薬学会会則 107